

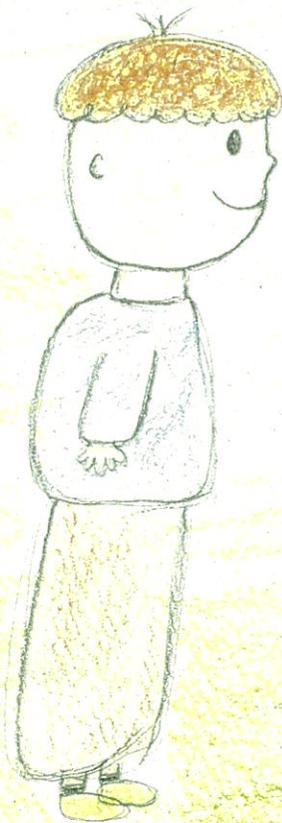
あつたにかしい

岸南



「こんにちは」っていったら、
「こんにちは」ってかえってくる。
ぼくのまちではあたりまえのこと。

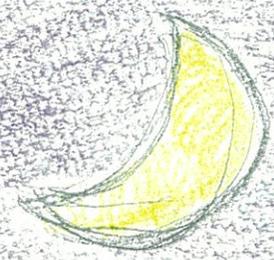
ある日、ぼくはネズミにあった。
ネズミがいった。
「ここはどんなばしょなの？」
ぼくはこたえた。
「あったかいばしょさ。」



「あったかいてなに？」
「そうだなあ。ここにうまれてよかつ
たっておもうことかな。ほっとして
げんきがでてくるんだ。」



空がくらくらした。
おつきさまとおほしさまがでてきた。
ぼくとネズミは空をみあげた。



ネズミがいった。
「ずっとここにいるの？」
ぼくはすこしだけかんがえてこたえた。
「わからない。でもそのせかたって
どんなだろう。」

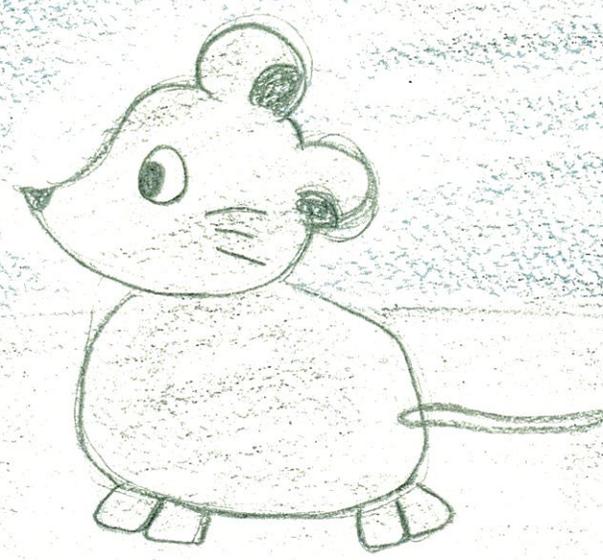
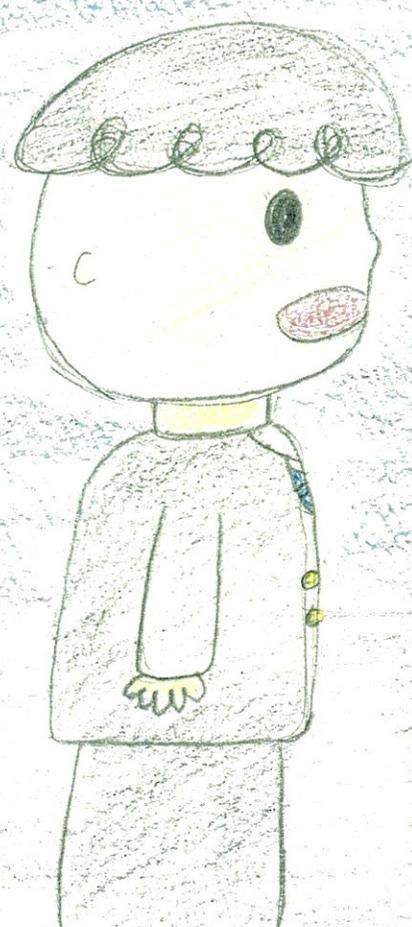
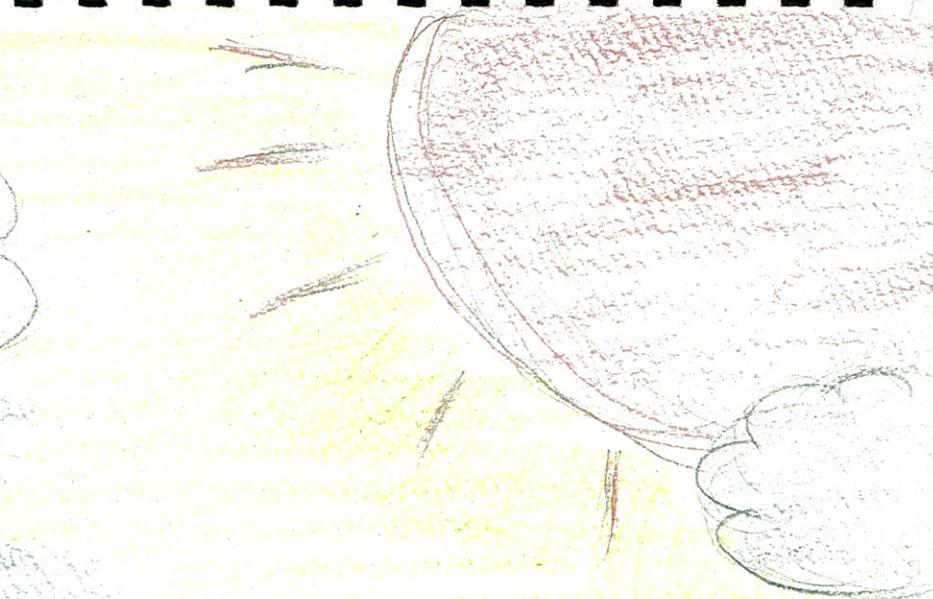


A pencil drawing of a city street. In the foreground, a young boy with a bowl-cut hairstyle and a neutral expression stands looking forward. He is wearing a light-colored suit jacket, a white shirt, and a striped tie. The street is filled with tall, rectangular buildings on both sides, each with a grid of windows. Two trucks are on the road: a red truck on the left and a blue truck on the right, both moving away from the viewer. The drawing is done in a simple, sketchy style with light pencil lines and some shading. The background is a light, textured wash of blue and green.

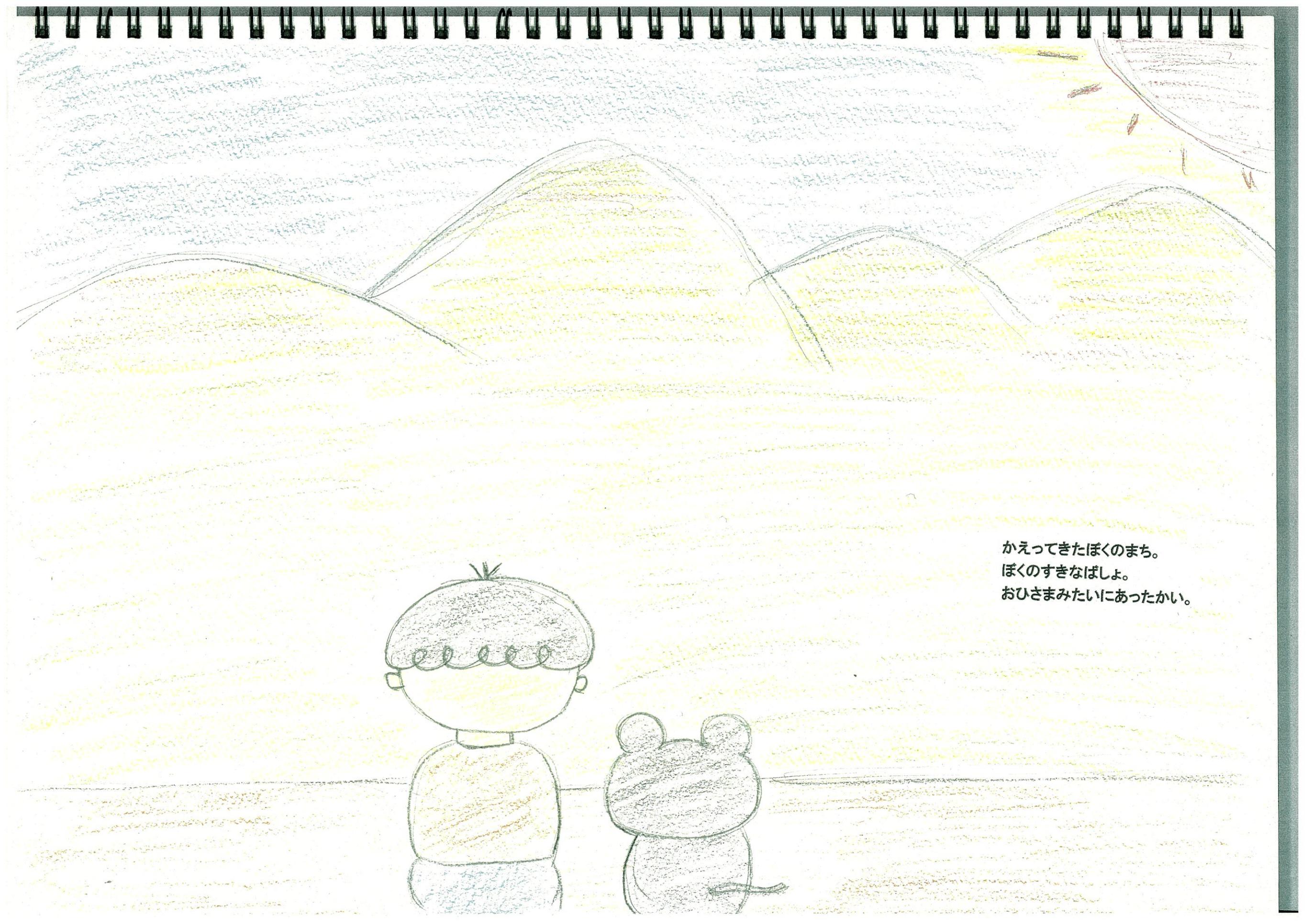
ぼくは大きくなった。
まちへでた。
ずっと広くて大きいまち。



でも、
「こんにちは」っていても、
「こんにちは」ってかえってこない。
なんだかつめたい。
すると、そのとき。



「かえっておいで。」
どこかできいたことのある声でした。
あたたかいぼくのまちできいた
あのネズミの声。
「むりしなくてもいいんだよ。
いっしょにかえろう。」



かえってきたぼくのまち。
ぼくのすきなばしょ。
おひさまみたいにあつたかい。